

ある説だった。

そりゃあもう、リーダーの姿を見て嫉妬に狂う彼女の姿がありありと目に浮かぶ。いつそ問い詰めてくれりゃお互い気が楽だろうに、そうはできない、という辺りが、また、彼女らしいといえる。

Xが言った「躊躇われる」というのもそうなんだろうが、確かめるのが怖いってが一番の理由じゃないだろうか。俺の心が離れることを、直接突きつけられるのが怖いということ。事実とは異なる悪い想像に溺れながらも「本当のことを知りたくない」って考えてしまうのは、何となくわかるってものだ。

だが、このXの推測が正しいとするなら、問題はかなり深刻だ。

「あの、X……、俺、どうすりゃ彼女の誤解を解けますかね……」彼女の誤解を解けてくれないうちに、俺が何を言ってもきつと聞いちゃくれない。余計なことを言えば絶対に逆効果、なわけ。俺にも縋る気持ちでXを見やるよ。

Xは、そりゃあもう、きょとんとした顔で首を傾げて。「さあ」と、のたまうのだった。

「ここまで言っていて投げけるの!」「申し訳ないのですが、それは、専門でないの……」「アంతの専門って一体何なんすか!? ねえ!」

詰め寄らずにはいられない俺、どこまでもしれつとした面で首を傾げるX。そしてリーダーはといえば、そっぽを向いて、声を殺して笑っていた。いや、これ、元はと言えばリーダーのせいなのは? リーダーが傘を忘れさえしなければ俺はこんな目に遭わなかったのでは?

思わず二人を交互に睨んでしまいう俺に、Xはもう一度だけ「お役に立てず申し訳ない」と付け加えてから、ごくごく真面目な調子で言うのだった。

「仲直り、できると、いいですね」俺は、Xがどうしてわざわざこんな「推測」を披露したのか、そもそも、どうしてここまで真剣に

話を聞こうとするのか、知らない。知らない、けれど。

ここにいて、俺の下らない話を聞いてくれる。それだけは、確かなことなのだった。

「……そうっすね。仲直り、しますよ、絶対に」

——俺にとつてのXとは、そういう、変なおっさんだ。

親くらいの世代に見える——実際にはもうちょい若いらしいが——

この牙えない面構えのおっさんが、『異界潜航サンプル』。生きた探査機、使い潰せる実験動物。

俺はこのおっさんについて、Xという識別記号と、刑の執行を待つ死刑囚だということしか知らされていない。サンプルの運用に背景情報は必要ない、というのがリーダーの判断だし、まあ、それに異論はない。

何よりも重要なのは、Xが、俺の理想の話し相手だということだ。

「この前からずっと話してるじゃないっすか、彼女のこと!」

Xは小さく頷いてみせる。Xはリーダーの許可がない限り声一つ出そうとしない。何もリーダーが喋るのを禁じたわけではなく、自分の意志でそうしているんだとか。そういうところも含めて、とにかく変なおっさんだ。

だが、それはつまり、俺が話している間は、絶対に余計な口を挟んでこないということもある。

「もうこの前までめちゃめちゃいい雰囲気で! 最高の雰囲気のままゴールインできるんじゃないかって信じてたわけですよ! 今度彼女の親御さんにご挨拶に行こうか、なーんてお話ししちゃったりして! なのに突然! そう、昨日突然ですよ! 彼女が打って変わって冷たくなっちゃって! 昨日は帰りに落ち合ってたのとしゃれこむつもりだったのに、待ち合わせ場所に顔も見せないし、慌ててLINEしたら、別れたほ

うがいいんじゃないかって言い出して! いきなり! いきなりなんですよ! マジで!」

Xがばばちと瞬きして、不思議そうに首を傾げてくる。喋らない代わりに態度が雄弁なのがXのいいところだ。言葉にせずとも、俺の話聞いてくれてる、というところはわかるから。

「心当たりなんて全然ないし、どうして突然そんなこと言い出したのかも教えてくれないし……いや、ほんと、途方に暮れるしかなくて……。LINEもあれきり既

読スルーだし……!」

こんなこと、Xに話したところで仕方ない、といえはそりゃあそうなんだが。リーダーにこんな話をするのはちょいと気が引けるし、サブリーダーは「無駄口叩くな仕事しろ」と一刀両断。先輩たちも俺の話には半笑いを浮かべるもんだから、真つ当に話を聞こうとしてくれるXの存在がどれだけ貴重か。

Xはじつと俺を見ながら、険しい顔で何かを考えているように見えた。一緒になって原因を探ろうとしてくれているのだろうか。だが、俺にわからないものがXにわかるはずもない。考えてくれるのはありがたいけれど……。

「珍しく二人して深刻そうな顔してるわね」

「リーダー」

割って入ってきたのは、外で休憩していたはずのリーダーだった。リーダーは俺がXと話をしているも、サブリーダーのように「Xに余計な話をするな」と口うるさく言っこないから助かる。

無名夜行 番外編

緑の目の怪物

青波零也

——『異界』

ここではないいずこか、此岸と彼岸、この世とあの世、もしくは、いくつも存在し得るといわれる平行世界。そんな未知の世界に異界潜航サンプルを放ち、そいつが目と耳で得た情報を分析するのが俺たちの仕事。

だが、正直なところ、今の俺はそれどころではなくて。

「Xううう聞いてくださいいとおおお」

とにかく、話を聞いてもらいたかったのだ。しかも誰でもいいわけじゃない、俺の話をしつかりばつちり最初から最後まで聞き届けてくれる、最高の話し相手に。

寝台の上に腰掛けたXは、ちよつと焦点のずれた目でじつと俺を見上げてくる。傍目には俺の

ネプリー同時配信企画ペーパーウェル 第8回「緑」
無名夜行 番外編『緑の目の怪物』

シアワセモノマニア
<https://happymonomania.com/>

青波零也 (@aonami)

Xはリーダーの方に視線を向けて、先ほど俺に向かってそうしてみせたように、軽く首を傾げてみせる。何かをリーダーに伝えようとしているのだろうか、と思っていると、リーダーが口元に指を持って行って、言う。

「何か言いたいことがあるなら、発言を許可するけど」

「ありがとうございます」

Xの口から、低い声が漏れて。それから、俺に視線が戻ってくる。「話を聞いているうちに、質問が、できたので。迷惑でなければ、聞いてもらえますか」

まさかXが俺への「質問」のためにわざわざ口を開くとは思わなくて、面食らう。そんな大した話のつもりじゃなかったのだが——いや、そりゃあ俺にとっては一大事だが、Xにとってはそうではないつもりだっただけに、自然と背筋が伸びてしまう。

「迷惑なんかじゃないっすけど……、何すか？」

「まず、『らりん』って、何ですか？」

——質問って、そこから？

いなかっただろう、リーダーは目を丸くして、それから「ええ」とXの言葉を肯定した。

「困っちゃった。ここに、私が使う駅までちょっと距離あるから」

「だから、同じ駅を使う人の傘に、入れてもらった。ですよね？」

そこまで話が及んだことで、俺にもやつとXの言わんとしていることが理解できた。できてしまった。

昨日、雨が降ることは天気予報で知っていたから、俺は傘を持っていた。けれど、リーダーは持っていなかった。そして、俺とリーダーは、普段から同じ駅を使っている、わけで。リーダーの目がこちらに向けられて、俺の視線とばっちり合う。

俺とリーダーの反応を肯定と見たんだらう、Xはもう一度浅く頷くと、「ここからは、私の推測、ですが」とぼつぼつと言う。

「彼女」さんは、昨日、あなたが寄り添って一つの傘を差しているところを、目にしたんじゃないでしょうか。あなた方に他意はな

「ええと、音声通話したり、メッセージをやり取りしたりするスマホのアプリっすよ」

「すまは？ あぶり……？」

それもわからないのか、と思っていると、横からリーダーが助け船を出してくれた。

「スマホはスマートフォン略。

『最近の携帯電話』の呼び名だと思ってくればいいわ。アプリはアプリケーション略で、スマートフォン内部で動くソフトウェア、と言えはわかるかしら。ちなみに既読スルーっていうのは、LINEの機能で相手がこちらのメッセージを読んでいるのはわかるけど、返事をよこさない、ってことね」

「なるほど」

Xはその説明で納得したらしい。多分。このおっさん、時々わかってもらえないのに「なるほど」って言うから、疑惑は残るけれど。

「つまり、恋人から電話で一方的に別れを告げられ、以降連絡もつかない」

「ざっくり言うとそういうこと

かったと、思いますか」

「け、けど、彼女との待ち合わせは別の駅で……！」

「迎えに来た、んじゃないですか。あなたが、帰る時間と、普段使っている駅を伝えていれば、可能で

す。例えば、あなたを、ちょっと脅かしてみたかった、とか。理由はいくらでも、考えられます」

そうでなくとも、たとえ一駅分、二駅分の距離と時間であろうとも、好きな相手とならもつと長く一緒にいたいと思いませんか。そう、Xはクソ真面目な面で言うのだ。

「けれど、心弾ませてあなたを待っていたのに、あなたは、知らない女性と、相合傘をしていた。もしかすると、傘の下、楽し気に談笑していたのかも、しれません」

まるで見てきたように言っている。そりゃあ、リーダーと一緒に駅まで行くことは結構よくあることで、お互いにちよつとした話をしながら帰るのは、当たり前で。

そう、俺は、リーダーをことさ「異性」と認識していなかった

す」

単なる確認のつもりだろうけど、改めて言葉にされると堪えるな。Xがどこまでも真剣な面と声音をしているから、余計に胸に来るものがある。これ、いつそ笑ってもらえた方が気が楽だったのでは？

Xはしばし黙った。まさか質問はそれだけなのか、それだけのためにわざわざ口を開いたのか。そんな危惧に囚われていると、不意に、Xが言った。

「昨日は、確か、午後から雨でしたよね」

「そうでしたね。早めに仕事も上げられるし彼女と会えるしって浮かれてたんですけど、天気だけはどうにもならない……、って、X、どうして知ってるんすか」

この研究室の窓は分厚いブラインドで覆われているし、窓や壁越しに外の気配が伝わらない作りになっている。異界潜航サンプルに外界の情報を必要以上に与えないため、ということらしい。

だから、Xが「午後から雨」な

のだと、今更気づかされる。

だが、彼女からしてみれば。

「裏切られたと、感じて、おかしくはない」

そういうことに、なってしまう。

しかも、リーダーは、控えめに言ってもとびきりの美女だ。……普段一緒にいる俺たちスタッフの間で、その事実は意識されなくなつて久しいが。まあ、そういう人なのだ。

しかし、いくらリーダーが「そういう人」であつたとしても、何も知らない彼女が俺と一緒にいるリーダーを遠目にでも目にしていただとしたら、どう考えるかの想像は容易い。容易すぎる。彼女は、ちよつと……、いや、かなり、嫉妬深い性質だから。

「しかし、『勝手に』あなたの職場の最寄り駅に足を運んで、仲睦まじい二人の姿を目にしてしまつた、ということ、あえて言うのも、躊躇われたのでは、ないでしょうか」

「だから、理由については何も言わなかったってこと、っすか

んて情報を知るはずがない、と、思っていたのだけれども。

「昨日の『潜航』が終わった後、皆さん、傘の話をしていました。持っている人も、忘れた人もいたようでした。だから、朝は晴れていたのかな、と」

「そうね。確かにそうだった。よく聞いているわね」

リーダーが感心したように声を上げる。俺だって感心しなかったといえは嘘になるが、すぐに我に返る。俺は何も、こんな話をしたいわけじゃないのだ。

「でも、雨が降つたことと、俺が彼女と破局の危機にあることに、何の関係があるんすか」

人の話は真面目に聞くが、その一方で普段から何を考えてるのかさっぱりわからないXのことだ、本当に関係がない可能性も零じゃない辺りが怖いところだが——。

Xは俺の言葉に対して浅く顎を引き、それから何故かリーダーに目を向けた。

「……昨日、傘、忘れましたよね」

まさか話を振られるとは思って

……

「けれど、事実を知らない、ということは、想像を広げること止められない、ということでも、ある」

——人は、いつだって、悪い想像が真実であるかのように、錯覚します。

低い声で呟かれたXの言葉には妙な重みがあつた。きつと、Xにも色々あつたんだろうな。人の想像力とやらに振り回されたことも、一度や二度ではなかったのかもしれない。その結果として人を殺して回つてちゃ世話はないが。

「……そして、これも、私の推測に過ぎません。言つてしまえば『悪い想像』の積み重ねです。あまり、真に受けないでください」

そう、Xは「話を聞いただけ」に過ぎない。俺がXに語ってきた彼女についての話と、昨日の帰り際に雨が降つていた、という俺たちスタッフの話、たつたそれだけの情報から組み立てられた、根拠の薄い想像。だが、少なくとも、俺にとってはそれなりの説得力が